



携帯電話を利用した自発的行動の支援

「指示待ち」が顕著な自閉症者の支援事例

* 本研究は国立秩父学園と共同で実施しました。

1 背景および目的

携帯電話は、画像や音声といった複数の種類の情報を組み合わせて呈示できます。携帯性の良さから、幅広い場面で認知機能に障害のある人の情報獲得を支援し、行動範囲を拡大するツールとしての応用が期待されています。本研究では、携帯電話により、自閉症者の自発的な行動開始を支援できるかを検討しました。

2 対象者

施設のグループ活動の時間になっても、職員から声をかけられる(指示がある)まで、活動場所への移動を開始できない自閉症のある青年期の女性でした。

3 携帯電話による支援の内容

携帯電話(NTTドコモ FOMA D800iDS)のタイマー機能を用い、グループ活動の時間になったら、「自室から玄関への移動」を促す音声と画像を呈示しました。

移動を促す職員の音声

グループの時間になりました。行ってください。

活動を知らせる画像



4 研究の結果、わかったこと

学習期間と導入時の配慮が必要

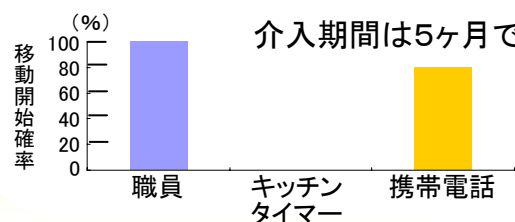
導入に際しては、行動開始の合図の理解を図るため、第一段階ではアラームが鳴った時に、職員が指差しにより注視を促しました。第二段階では、職員の介入を無くし、携帯電話のみの支援としました。当初、対象者は携帯電話で情報が呈示されても周囲の人に指示を仰ごうとしましたが、職員が反応しないように心がけたことで、最終的に携帯電話の使用法を習得できました。

呈示する情報は具体性が高い必要がある

呈示する音声を、**具体的な行動を明示する**「手織りグループです。靴を履いてください。」に変更した結果、携帯電話の情報に基づいて行動することが多くなりました。

携帯電話からの情報は行動開始を促しうる

下のグラフは、「職員」「キッチンタイマー」「携帯電話(使用法の学習後)」、各々から活動の促した時に、対象者が移動を開始できた確率を表します。**携帯電話を用いた視覚、聴覚情報による促しにより、声かけと同程度の行動開始が達成されました。**



研究担当者

国立障害者リハビリテーションセンター研究所
福祉機器開発部
氏名 石渡利奈 (ishiwata-rina@rehab.go.jp)・武澤友広

